

## ソグド文字

### ■ソグド系文字

ソグド系文字の話しの前に下の写真をご覧ください。これは東方アラム文字南メソポタミア系のマンデ文字と称されるもので<sup>1</sup>、右から左に横書きされている。鉛製巻物の一部。



マンデ文字鉛製巻物断片（古代文字資料館所蔵）

アラム文字はアケメネス朝ペルシアの公用語であったアラム語を記した文字であるが、これから述べようとしているソグド文字はアラム文字に発するといわれている。ソグド文字はソグド語というイラン語系の言語を記した文字であり、その後、西方よりアジアの北部へと持ち込まれ、

- ・ウイグル文字（9～14世紀）。
- ・モンゴル文字（13世紀～今に至る）。
- ・満洲文字（17～20世紀）。

と改良されながら伝わり、現在の

- ・中国新疆ウイグル自治区の錫伯(沐)族の錫伯文字。
- ・中国内蒙古自治区のモンゴル文字。

となった。これらの文字をソグド系文字と称する。単音を表わす表音文字で、1字が意味を担うことはない。すくなくともウイグル文字以降は、英語の綴りのように、単語などは

---

<sup>1</sup> ヨセフ・ナヴェー著津村俊夫他訳 2000 の 162-184 頁参照。

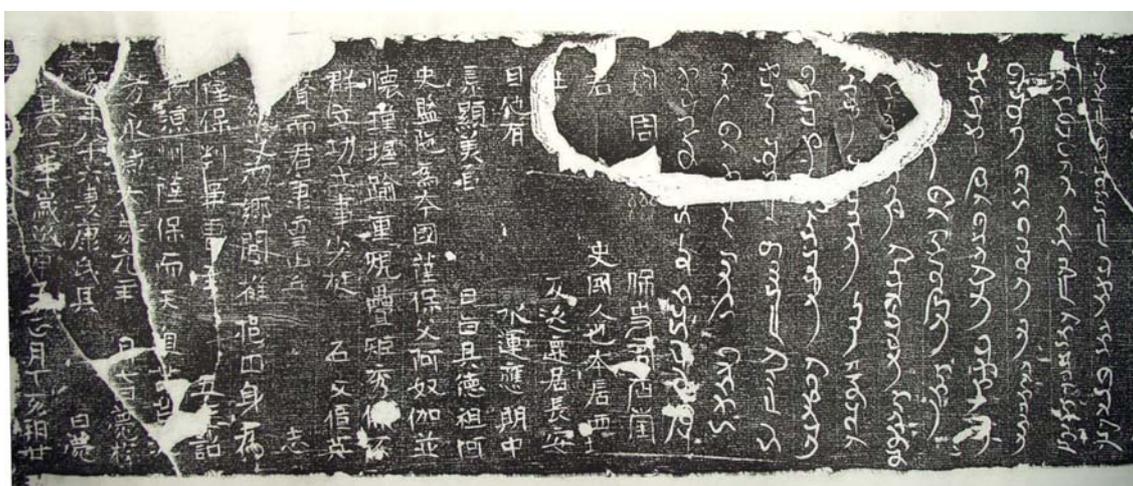
連書され、意味の切れ目に対応した分ち書きがある。

### ■ソグド系文字と漢字

ソグド系文字と漢字は文字使用の長い伝統を持つ。両者とも牢固な文字組織のように見えるけれども、字形だけでなく文字組織全体の上から見たならば、あちらこちらに接触によって生じた痕跡（あるいは痕跡らしきもの）をみてとることができる。そのあたりの事情を、これより概観してみたい。

### ■ソグド文字

さて、アラム文字は右から左に横書きされたという。ソグド文字も同様であったとされるが、次の拓本のように6世紀末の碑文には漢字と同様に縦書きされたものがある。



北周・大象二年（580）史君墓誌拓本（古代文字資料館所蔵）

碑文の中央より左側が漢字漢文で縦に右から左に向かって書かれ、碑文の中央より右側がソグド文字ソグド語で縦に左から右に向かって書かれている<sup>2</sup>。初期の資料には1字毎に離して記されたものもあるが、ふつうには単語などは連書され、意味の切れ目に対応した分ち書きがある。やや時代が下った7世紀前半になるとソグド文字の書記方向について興味深い記述が現れる。それは玄奘の『大唐西域記』であり、そこにはソグド文字は縦に書かれると明記されている。

- ・素葉城から羯霜那国に至るまで、土地は窣利(ソグド)と名づけ、人も窣利人という。文字・言語もその名称に随って窣利文字・窣利語と称している。字のなりたちは簡略で、もと二十余文字であるが、それが組み合わさって語彙ができ、その方法が次第にひろがって文を記している。ほぼ記録があり、その文を豎(たて)に読んでいる。そのやり方を順次に伝授して、師匠も弟子もかえることがない。(『大唐西域記』巻第一)<sup>3</sup>

<sup>2</sup> 同様に縦書きされた資料として吉田 豊 2003 (90-99 頁) にモンゴリアで発見されたブグト碑文が紹介されている。

<sup>3</sup> 水谷真成訳注 1999 (57-58 頁) による。水谷氏の注には「ソグド文字はシリアのアラム文字を基にした

現在においてもソグド文字の文書は数多く残されているが、文書類は縦にも横にも動かすことが可能であるため縦書きであったか横書きであったかを判断するのは困難である。したがって、玄奘のこの証言は極めて貴重である。この証言によるならば、玄奘が訪れた7世紀前半の西トルキスタンでは縦に書かれたということになる。なぜ縦書きが現れたか定説はないようであるが、これを漢字漢文の影響とする見方もある<sup>4</sup>。その適否は後の課題として、縦書きとなったことにより漢字漢文との併記が容易になったことは確かである。

参考文献〈発行年順〉

水谷真成訳注 1999. 『大唐西域記 1』 東京：平凡社。

ヨセフ・ナヴェー著津村俊夫他訳 2000. 『初期アルファベットの歴史』 法政大学出版局。

庄垣内正弘 2001. 「ウイグル文字」, 『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』 河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著, 三省堂, 2001年, 118-121頁。

吉田 豊 2003. 「ソグド文字とソグド語」, 『NHK スペシャル文明の道 ③海と陸のシルクロード』 東京：日本放送出版協会。

(文責：吉池孝一.2010.2.16)

---

文字であり、このソグド文字からウイグル文字が案出された。通常横書きされるが、玄奘のいう「その文を豎読みする」書き方もあった。」(59-60頁)とある。注は「書き方もあった」と慎重な表現をとる。なお、『大唐西域記古本三種』(北京：中華書局影印、1981年)の敦煌本残巻によると「自素葉水城至羯霜那國、地名率利、人亦謂焉。文字語言、即隨稱矣。字源簡略、本二十餘言。轉而相生、其流浸廣。粗有書記、豎讀其文。遞相傳授、師資無替。」とある。

<sup>4</sup> 庄垣内正弘 2001 参照。